
あの唄をきかせて

オンダヒツギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの唄をきかせて

【Nコード】

N1974E

【作者名】

オンダヒツギ

【あらすじ】

アメノ・ウズメはボクのために唄った。それは、ボクという檻にボクという人格を停滞させるお呪い。その唄のおかげで、ボクはボクのままでいられる。だけど、彼女と過ごしているうちにボクは不可解な白昼夢を見ることになる。殺されたボク。コノハナ・サクヤという少女。そして、心臓。それから、ナイフ。それらの白昼夢を見ているうちに、ボクは気づいてしまった。ウズメの唄は、ボクの死を加速させる呪いでもあるということに。だけど、ウズメはずっと唄い続けるだろうし、ボクも黙って彼女の唄を聴き続けるだろう。

ウズメは、咽が枯れるまで。ボクは、命が枯れるまで。

prologue

「初めまして、かな？」

視線だけを動かして声がしたほうを見る。

薄い微笑みを浮かべたウェイトレスが、ボクを見ていた。

彼女が、どうしてボクにそんな表情を向けているのか、良くわからなかった。

少なくとも、この場所においては相応しくない素振りだと思った。相応しいのは、そう彼女が着ている制服くらいだ。

もしかしたら新しいサービスなのかもしれない。だけど、さっきのあの探るような台詞はいささか違和感を覚えたし、今も保持されている彼女の微笑はやけに親密的だ。いずれにせよ普遍的なサービスではないだろう。

ボクは黙って彼女の次の言葉を待っていた。そうすることで、この不思議な状況を理解できるだろう、と思ったからだ。

「私のこと、覚えているかな？」首を少しだけ横に傾けて、彼女は訊ねる。

「ああ……」ボクは首肯する。つまり、彼女と会うのはこれが初めてではないということだ。「悪いけれど、覚えていないよ」

「本当に？」生まれたての仔猫みたいに、彼女は目を細めてボクを見据える。

「勿論。だって、君に嘘をつく理由がボクにはない」

「本当に、なにも覚えていないんだ？」

ボクは黙って首を縦に振る。正直、彼女が信じようと信じまいと、どちらでも良かった。それでも彼女は、前屈みになって、猫みたいな目を見開いて、ボクを見据える。

「そんなことより、注文しても良いかな」手にしているメニューを一瞥してから、ボクは言った。

彼女は瞬きを数回繰り返したあと、短く息を吐いて姿勢を正す。

それから、おもむろに端末を手にして、勿論、お聞きますよ、と微笑んだ。

クラブハウスサンドとコーヒーを彼女に依頼する。メニューを反芻している彼女の声をぼんやりと聞きながら、テーブルに載せていた煙草へ手を伸ばす。

「この前とは、銘柄が違うね」目敏く彼女が指摘する。

「そうかな」ボクは首を竦めた。「君が言ううんなら、きっとそうだろうね」

片目を細めて彼女は腕を組んだ。ボクという人間を量りかねている、そんなふうなジェスチャーだった。煙草を口にくわえるまで彼女はそうしていた。ボクが煙草に火をつけると、彼女は両目を丸くして少しだけ後退する。まるで炎を怖がっている狼みたいだ。このままカウンターの奥まで誘導しようか、と思ったけれど、苦笑を浮かべるだけに止めておいた。

「美味しいの作ってもらうから、待っててね」

唇を僅かに持ち上げたあと、彼女は身体を翻す。尾長鳥の尻尾みたいに結わえられている長い髪が、その動きに合わせて静かに揺れていた。

彼女がカウンターの奥に消えるまで見送る。それから、椅子の背もたれに背中を？ずけて、吐き出される煙りをボクは眺める。煙りは上昇しながら世界を包んでいた。世界を少しずつ切り取りながら煙りは拡散していく。その現象にシンパシーを覚えるのは、他でもない、ボクという人間がそれと似たシステムを備えているからだ。

つまり、ボクは煙りと同義なのだ。

煙りのように生まれて。

煙りのように消えていく。

その限られた時間の中で情報を蓄積させて、死の瞬間に放出する。情報とは即ち思い出のことだ。つまり、ボクにはそれが無い。今日のことは覚えていても、昨日のことは覚えていない。そして、明日になれば今日のこともボクは忘れてしまうだろう。

だから、ボクという人間は、毎日死んでいるようなもの。

彼女を世界から切り取ってペーストしたボクも、きっと今頃は天国のドアを叩いているんじゃないかな。明日になればボクもその仲間に加わる。そして、新しく生まれたボクも、次の日には同じ運命を辿ることになるんだ。

「唇、火事になるよ」

ウェイトレスの声で、ボクは思考を中断した。唇に挟まっている煙草を取り出す。ビーバーに齧られたみたいに、煙草はフィルター近くまで消耗していた。アルミニウムの灰皿にそれを投げ入れる。それから、椅子に座りなおしたあとで、対面している彼女をボクは見つめた。

「お待たせしました」彼女はそういつてから、まるで平泳ぎの練習をしているかのように両手を水平に広げる。

「どうして座っている？」テーブルに載せられた料理を一瞥して、再びボクは彼女を見つめる。「仕事は、続けないの？」

「続けてるよ。君の傍にるのが、私の仕事。私が座っている理由がそれ」

「ボク以外のお客は？」

そう訊ねるボクに、彼女は瞬きを試みせる。そして、おもむき向きを見回したあとで、彼女は首を竦めた。

「空気に漂っている、アメーバの注文でも受ければ良いのかな？」

彼女は少しだけおどけたふうに、そんなことを言う。「なんてね。冗談だよ。呆れた顔しないでよ。見たとおり、暇なの。そんなことよりも、食べて食べて」

肩を竦めて、クラブハウスサンドを一切れ摘まむ。

口に運んでから咀嚼するまでの一連の動作を、彼女は黙って眺めていた。気のきいたパフォーマンスをしているわけでもないのに、彼女はどこか愉しそうだ。そんな彼女に小首を傾げながら、ボクはコーヒーに手を伸ばす。

「ウズメだよ」

まるで、目の前に置かれたワインの話をするソムリエみたいに、彼女は言った。だけど、ボクが手にしているのはカップでありグラスではない。かといって、コーヒ―豆の銘柄でもなさそうだ。

ボクが黙っていると、彼女は唇を尖らせて、同じ言葉を繰り返した。

「あ、そう」苦笑をして、それから彼女に応える。「それって、君の名前？」

「当たり前だよ。こんな可愛い名前、私以外に誰がいるの？」

「今のところ、君しか該当なさそうだね」

「今も昔も私しか該当しないの」

「冗談だよ」

「もう……」ウズメは嘆息する。「やっぱり、私の名前、覚えてない？」

首を縦に振ることでボクは応える。

「そう」ウズメはすこしの間、目を伏せた。「君の名前は、教えてくれないの？」

「セト。アマカセ・セトだよ」

「自分の名前は覚えているんだ？」

「まあね。多分、これは記録だと思う」

「私のは？」

「きつと、記憶」

「だから、覚えてない？」

「そういうこと」

「ああ……、どうして私、こんな人好きになっちゃったんだろう」「どういうこと？」

「私、君のことが好きなの、オーケー？」

「いや、だから、どうして？」

「煩いな。溺れている子供を助けるのに、理由が必要？ それと同じことだよ」

「全然、違うと思うけれど」

「嫌い嫌い嫌い。お願いだから、セトのこと好きでいさせて」

「きつとそれは、君のためにならないと思う」

「そんなこと、私が決めるよ。だからお願い、ね。それに、約束もあるし……」

「約束？」

「うん、約束」

「どんな？」

訊ねるボクにウズメは苦笑を浮かばせた。そして、彼女は、笑っているような、泣いているような、そんな複雑な表情をボクに見せて、こう言ったのだ。

「君のために唄うこと」

それこそ、唄っているように声を震わせて。

episode 1..1

その日の夜、ボクはウズメの部屋に招かれた。

彼女のアパートは煉瓦を敷き詰めた古い建物で、ひび割れているコンクリートが剥き出しになっている部分が数ヶ所あった。きっと、酔っ払いがチョコレートだと勘違いして持ち帰ったに違いない。一階はテナントになっていて、そこはバーになっていた。揮発したアルコールの薫りをアパート一帯に充満させている。そんな時間の経過を感じさせる、古めかしいバーだ。

そのバーの裏側にある駐車場に車を止めて、ボクはウズメに手を引かれて非常階段を昇った。どうしてエレベーターを使わないのか、と彼女に訊くと、エレベーターを使うと早く着いてしまうから、と彼女は言う。

要するに、できるだけ彼女は、ボクと長く手を繋いでいたいのだ。それが間違った解釈ではないことを、手のひらに伝播する体温が教えてくれる。ボクの手を握る彼女の手のひらは冷たい。きっと、彼女は正直な人間なのだと思う。

「セトの手、温かいね」

「嘘つきの手は皆、温かいんだ」

「なあに、それ？ 可笑しい……」

五階の踊り場で立ち止まって、そこから通路へ這入った。彼女の部屋は通路の端っこだ。ドアに取りつけられているパネルに彼女は触れ、ナンバーを入力する。パスワードを認識した電子音が発せられたあと、ロックが外される音がかちつと鳴った。

部屋の中は、ホイップしたクリームの薫りに包まれていた。攻撃的な香水の薫りではないのは確か。多分、それは彼女自身の薫りだったのかもしれない。

その残留する薫りに当てられたのか、彼女はリビングに這入るなりバッグを床へ放り投げて、ボクに抱きついてきた。

ウズメの唇が、ボクに漸近する。

彼女の呼吸が皮膚に触れた。

それから接触。

そして停滞。

彼女の唇は、少しだけ、ボクの唇から逸れて当てられていた。

しばらく逡巡。

背中に張りついていた指が食い込む。

呼吸を止めて、首をスライドする。

彼女の感触を認識してから、目を瞑った。

「大好きだよ」唇を離してから、ウズメが言った。

ボクは黙っていた。

ウズメは苦笑を浮かべる

「セトは嘘つきなんかじゃない」。ボクの頬に、ウズメの冷たい手のひらが触れた。「それでも、私、君のことが好きなの」

「ウズメが好きになったボクは、もうここにはいないよ」

「どこにいったの？」

「多分、天国」

「嘘。だってセトは……、ここにいるじゃない」

「記憶を失うことは、死んでしまうのと同義だよ。だから、今のボクは、まったく別の、人格なんだ」

ウズメは俯いて、それからゆっくりと顔を上げる。表情は読み取れなかったけれど、彼女の沈黙がボクのことを理解して、しかもそれを受け入れていたのは明らかだった。

それでも、ウズメの気持ちは変わらないのだろう。いつからかはわからないけれど、きっと彼女はその気持ちをオイルみたいにボクへ流し込んできたのだ。だけど、ボクは壊れていて、そんなことをしても元には戻らない。戻らないのに、彼女はそれをずっと続けてきたのだと思う。

一体、なにがウズメをそうさせているのか、ボクには理解できない。もし逆の立場だったら、ボクなんかすぐに諦めてしまう。何故

だろう。きっと彼女の中である種の意地のようものがライオンみたいな誇りで蠕動しているのかもしれない。だから、彼女は諦めきれずにこんなことをしてるんじゃないかな。そう考えると、少しだけ理解はできる。淋しい気はするけれど。

ボクは心の中で苦笑する。

そんな感情がボクにあったのが可笑しかったからだ。

淋しい、だなんて、すぐに消えてしまうボクには必要のない感情。そんなことを思ってしまうなんて、まったくどうかしている。香水の人工的な薰りみたいに、ウズメのセンチメンタルがボクを攻撃しているせいなのかもしれない。だからあんなくだらない思考を浮かべてしまったのだ。

勿論、意地なんかでボクと関わっているのではないことは、わかっている。ウズメは、そんなに複雑な人間じゃない。潔いくらいに実直でシンプルな人間だ。そう、故障しているボクなんかとは違って。

ボクは、見つめているウズメの瞼に手を当て、それをそっと閉じた。彼女の唇の位置を記憶してから、ボクも目を閉じる。

呼吸を止めて、ウズメの唇にボクの唇を重ねる。

長いキス、そのあと短いキスを一回した。

「好きでいて、良いでしょ？」目を三日月にしてウズメは言った。

「構わないよ」ボクは応える。

それ以上の言葉は、喉の奥に隠しておいた。だって、ウズメはその言葉を予測してたと思うし、それを知った上で、さっきボクに見せた笑顔を保持し続けているのだ。

だから、言葉が続けてもしかたがない。

ウズメの哀しむ姿は見れないけれど、妄想するくらいならボクだってできる。それでも彼女は、ボクを望んでいる。お互いにとって良くない未来を、彼女は受け入れようとしている。

そんな彼女に、もう言葉はいらない。

違うか？

いや、多分これもボクの妄想なのかもしれない。
でも……、

明日になって、ウズメがキスを求めてきても、違う場所にボクが
キスをするのは、きっと妄想なんかじゃない。

episode 1..2

とても粘性が高くて、密度の濃い夜。そんな作りたての水飴みたいな時間を、ボクとウズメは共有した。さっきまで、ボクの上に乗っていたウズメの重さはもう感じられない。ウズメのベッドで横になって、ときどき彼女がシーツを擦る音に、ボクは静かに呼吸を合わせている。

闇と同化しているウズメの髪が、スタンドの光を反射している。まるで月に照らされる水面のような輝きだ。手を差し入れれば、もしかしたら眠っている魚を掬い上げれるかもしれない。彼女の髪にそっと触れる。女の皮膚みたいに柔らかい。魚はいなかった。多分、ボクの気配に気づいて逃げてしまったんだと思う。

ベッドから降りて、窓に向かって歩いた。

オレンジ色の月を視認。それから、地上には斜めに伸びている二つの影。男と女がよたよたと歩きながら纏れ合っていた。恐らく、バーから駐車場に向かっていている客なのだろう。ボクは、心の中でピストルを取り出してから二人を撃つ。男は地面に倒れこんだ。女の方は、そんな男を指をさして笑っている。壊れた冷蔵庫のような奇妙な周波数だった。可愛そうに、きつとボクが撃ったからだ。

黒ずんだ雲を眺めている内に、煙草に火をつけなくなった。ウズメの部屋に来てから、ボクは煙草を一度も吸っていない。それは、彼女の部屋に灰皿が見当たらなかったからだ。きつと彼女は、煙草を必要としない人間なのだろう。昼間の彼女のことを考えてみると、それも頷ける。つまり、彼女は火を恐れているわけではなかったのだ。

ボクは窓から離れて、フローリングに落ちているシャツに手を伸ばした。まるで死んだ海月のように皺くちやになって広がっている。「どこへ行くの？」シャツを手にしたとき、背中からウズメの声。

「外、煙草が吸いたくなった」振り返ってからボクは応える。ウズ

メはベッドに腰掛けていた。裸のまま。

「そう……。じゃあ、私も外へ出ようっと」

「ボクだけで良いよ」

「どうして？」

「さっき人を撃ったんだ。男と女。男はまだ倒れているかもしれない。女の方は知らないけれど……」

「どういう意味？」

「危険かもしれない、って意味」

「なあに、それ？　女がセトに復讐しに来るとか？」

「男がゾンビになって、ボクに復讐するかもしれない」

猫みたいな目でウズメはボクを見据える。

それから、しばらくして彼女は首をすくめてから薄い微笑を浮かべた。

「気をつかわなくても良いよ」身体を弾ませ、ウズメはくすりと笑った。「別に、煙草嫌いじゃないから」

「でも、吸わない」僕は微笑んだ。

「吸わないけど、嫌いじゃないの」ウズメは言った。熱帯魚みたいに唇を尖らせてボクを睨んでいる。

「オーケー。わかった。じゃあ、一緒に外へ出よう」

ウズメは頷いて、ベッドから腰を浮かせた。彼女の長い髪が皮膚に重なる。

「先に出てようか？」ウズメの背中を見ながらボクは訊ねた。

「どうして？」ウズメは訊き返す。ボクは応えなかった。

「気をつかわなくても良いよ」ウズメは振り返って、またそんなことを言う。ボクが首を竦めると、彼女は自分の身体を一瞥したあと、目を細めてボクを見つめる。「それとも、私の裸が嫌い？」

「嫌いじゃないよ」

「じゃあ待ってて」

ウズメの言う通りにボクは待った。緩慢な動作で着がえながら、ときどき彼女はボクを見ていた。ボクはただ彼女を眺めているだけ

で、やっていることといえば、シャツのポケットに手を当てて、銀色の星をもらった兵士みたいに胸に膨らむ四角い感触を確かめているくらいだ。

「明日、買ってくるよ」

「なにを？」

「灰皿だよ。ねえ、どんなのが良い？」

ボクは逡巡する。

ウズメが明日どんな灰皿を買ってこようが、それはボクにとって意味のないこと。ボクの思考に堆積する彼女の言葉みたいに、曖昧になって、ぼやけて、しだいにその輪郭を失うことになるだろう。まるで煙草の煙りのように。

ボクみたいに。

ボクと一緒に消えてしまう。

だけど……、ウズメは消えない。ボクの言葉が彼女の耳に残るように、ボクの姿が彼女の瞼の裏に焼きついているように、灰皿もまたその形を保ち続けているに違いなかった。

「アルミニウムのやつ」

「アルミニウム？」

「レストランにあったやつだよ」

「ああ……、あれ？　なんだ普通じゃない」

「いや、冷たいところがセクシーだし、丸っこいのがグラマーだ」
ウズメは手を叩いて笑った。「わかったよ。じゃあ、それにするね」

ボクは無言で頷く。

どうしてアルミニウムの灰皿を選んだのかはわからなかったけれど、でも悪くはない。ウズメの手も触ったら冷たかったし、きっと彼女と同じくらい正直なんじゃないかな。それにどこにでもありそうだから、明日のボクも違和感なくそれを受け入れるかもしれない。これはボクの希望的な観測なのかもしれないけれど。

episode 1..3

外は寒かった。

非常階段の手すりに凭れながらオレンジ色の月を眺めていた。

さっきまで近かった空は、今は遠くにある。

ボクは、ときどき口にくわえている煙草の光を確認し、それから地上を見下ろして、蛾の鱗粉のように灰が地面に落ちていく様子を眺める。それは膝の辺りまで視認できたけれど、それから下は闇と同化して見えなくなった。空に昇る煙りも同じだ。拡散して。粒子になって。闇に同化して。空気に蕩ける。汚いものは空へは行けない。灰みたいに地上に落下するか、煙りみたいに途中で消えてしまう。そう、あとに残るのは燃え尽きようとする身体だけだ。

呼吸を止める。

じりじり、と煙草が殺虫灯みたいな音を立てた。

その流れを止めても、先端の光は緩やかに進んでいる。

苦笑。そして、思いつきり息を吸って光を加速させた。

煙りを吐く。

煙草を指で叩いた。

それから煙草を足元に落とす。

フィルターの間くまで光は浸食していた。

ボクの足元に、ゾンビみたいに燻ぶっている。

「良いの？ そんなところに捨てて…」

「駄目だよ」そう言うってからボクは振り返る。非常階段のステップにウズメは座っていた。ボクが見下ろせる位置だ。勿論、煙りは彼女には届かない。「消したらすぐに拾うよ」

「拾ったらどこに捨てるの？」

ボクは黙ってウズメの横にある缶ビールを見る。

「これ？」缶ビールを手にしてウズメは首を横に傾ける。「まだ空いてないじゃない」

「これから空けるよ」煙草を足で揉み消す。

「やっぱり灰皿は必要だね」缶ビールを差し出してウズメは言った。
「なんなら二つ買っとく？」

「二つ？」缶ビールを受け取りながらボクは訊いた。

「そう、二つ。部屋用と外出用」

「必要ないよ」

「どうして？」

「部屋に一つあれば充分だよ。それがあれば外で煙草を吸おうとは思わない」

「あ、そうか」ウズメは舌を出してから、目を三日月にする。「そうだね。一つあれば充分だね。そうそう、私の部屋に一つあれば充分なんだ」

病気になった鸚鵡みたいに、同じ言葉を繰り返すウズメをボクはじつと見ていた。彼女は愉しそうだ。きつとボクとの夢を描いているに違いない。夢と言うほどにはそんなに遠くて不定ではないけれど。いずれにしろそれは、ボクにもウズメにも掴むことができないのは明らか。

それでも、彼女はなにごともなく明日を迎えることができるだろう。

それに、ボクだって明日を迎えることだけはできる。

だけど、彼女の傍にいるのはボクじゃない。

地面に落ちている吸殻みたいに、今日と一緒にボクは忘れさられてしまう。

缶ビールの底の沈殿した暗闇に、ボクの死んだ細胞は閉じ込められるのだ。

そしてボクという人格は空に昇っている途中で拡散しているか、地上に落ちて地面に溶けてしまっているだろう。

新しく生まれてくるボクは、ウズメの夢を知らない。

だから結局、二人は夢を掴むことはないのだ。

なにかが弾ける音が聞こえた。

ボクは振り返って音がしたほうを眺めた。

ばちばちと攻撃的な音を響かせている殺虫灯の近くで、一匹の蛾が踊っていた。鱗粉に光を反射させながら。羽を開閉しながら空中に停滞している。

ボクは視線だけを地面に向ける。それはコンクリートの上で蛍光灯に照らされていた。動く様子は窺えなかった。きっと殺虫灯の衝撃に殺されたのかもしれない。

「なにを見ているの？」

「殺虫灯……、蛾が飛んでいる」

しばらくボクとウズメは殺虫灯を眺めていた。二人で缶ビールに口をつけながら、飛んでいる蛾を見ていた。ボクがまた煙草を吸いなくなった頃、そこにもう一匹の蛾が割り込んできた。これでまた二匹だ。ボクがそう思っていると、新しいそいつは、先にいた奴と少しだけじゃれあったあと殺虫灯に飛び込んだ。

スパーク。

ばちばち、と弾ける音。

きらきら、と輝く鱗粉。

ゆらゆら、と落ちる。

ゆらゆら、と地上に堕ちていく……。

「可愛そうに」ウズメは言った。「先に飛んでいたのも教えてくれれば良いのに……」

「教えてくれたら死なずにすんだ？」

ウズメはなにも言わなかった。唇を噛んでボクを上目遣いで見ていた。

そうだ。そんなことは誰にもわからない。

きっと神様だってわからないだろう。

わかっていても止められない。

きっと神様だって……。

episode 1..4

煙草を三本ほど消耗したあと、ボク達は非常階段を使って部屋に戻った。それからボクはシャワーを浴びて、ソファの背凭れに身体を倒した。ビールを片手に、ノイズ交じりの音楽を聴いていた。最初は気にならなかったけれど、大人しく聴いているうちに、しだいにそれが壁で爪を研ぐ猫みたいに煩わしく思えてきた。

腰を上げて、リビングの隅にあるキャビネットへ歩み寄る。まるで生まれたときからそこにいるかのように、そいつは酷く澄ましているんだ。ボクは撫でるようにそっとラジオを弄って周波数を替える。ときどき、怒っているような声を漏らしていたけれど、構わずにボクは続けた。やがてそいつは大人しくなって、それから鈴のような声を上げる。女の声だ。

ラジオはニュースを流していた。殺人事件に関するニュースだった。

殺されたのはこれで三人目。どれも同じ手口で殺されているので、警察側は同一の犯行として捜査しているらしい。要するに、連続殺人事件らしかった。身体にシリアルでも刻んであるのだろうか？ それとも欠落した部位があるとか、あるいは凶器が同じもの？ いろいろと考えは浮かんだけれど、ボクはすぐに思考を中断して、再びソファの背凭れに身体を倒した。

まともに聴けるのはこれくらいしかなかった。内容がまともじゃないのが笑えるところだけれど。でも、パーソナリティの声が透明な分だけ、他の番組よりは幾らかマシだと思う。彼女の透明な声が空気に震えて、電子と擦れ合って、辺りに充填したとげとげしいものを洗い流しているような気がするからだ。だからボクはこうして、剣呑なニュースを聴きながらもんきにビールを飲んでいられる。

髪の毛はすっかり乾ききっていて、そこから人工的な甘い薫りが立ち込めていた。最初に、この部屋へ入ったときに感じたのと同じ

ものだ。なるほど、これがウズメのデフォルトってわけだ。

ふと、急になんだかおかしくなる。

まったく噛み合っていないな、と思った。

ラジオから漏れているパーソナリティの声はやけに透明なのに、どろどろとした殺人事件のことを話していたり。ボクはというと、事件のことを考えていたかと思えば、ウズメが使っているシャンプーの秘密のことを考えていたりしている。リビングに薫っているのはホイップしたクリームみたいな甘いやつだし、それからそこに漂っているのは、とげとげしさをすっかり失っているけれど、危険なことには変わりのないニュースだったり。とにかく、なにかもがちぐはぐでバラバラの状態、子供がおもちゃ箱をひっくり返したようなそんな混沌とした状況と言える。本当に、まったく噛み合っていない。まるでライオンのたてがみみたいに誇らしげに飾られている、教会のステンドグラスの中にでもいるような気分だ。

そう思うと、なんだか本当に笑えてきた。

その世界の中に、ボクが存在している不思議。

その世界の中に、ボクが生きている奇跡。

本当に、まったくどうかしている。

神様ってのは、こんなにチャレンジブルな奴だったっけ？

昔のことは覚えていない。明日のことは知らない。そんな今日しか生きられないボクに、この世界に留まっている理由がどこにある？

ボクが、この世界に留まっている理由を教えてくださいませんか？

ボクに、枷をしている奴は一体誰だ？

ボクは、煙りじゃなかったのか？

ボクは、煙りじゃないのか？

だったら煙りのように消えてしまおうか……、とボクは思った。

そう、ウズメがシャワーを浴びている間に。

しかし、その思考が身体を制御できていないのも事実。

壁にかけてある時計を見る。十一時。ボクに残されている時間はあと一時間。あと一時間経てば、今日という記憶がリセットされる。

つまりそれは、ボクという人格が消失してしまうってこと。だけど、今までのウズメの素振りを思い出してみると、それが実はボクだけの妄想じゃないかと思ってしまう。

その中途半端な思考が、ボクをこの場所に留めているのかもしれない。背徳者が押しつけた吸殻のように、くしゃくしゃになってステンドグラスにぶら下がっている煙草みたいに、ボクはまだこの世界にだらしく執着しているのだろう。

一体、ボクはなにに執着しているのだろうか、と考える。
すぐに答えは出てきた。

なるほど、ボクはなにかを待っているらしい。
でも、なにを待っているかまでは、わからない。

ビールを飲む。ビールは少しだけ弱っていた。何故だろう。殺虫灯に触れて、地上に墜落していく蛾を、ボクは連想した。

蛾は堕ちていったけれど、ボクは堕ちていない。

きつと……、

まだ……、

ボクは殺虫灯に焼かれているのだろう。

episode 1..5

「飲み物のおかわりは？」声がしたので、振り返ってみると、リビングの入り口にウズメは立っていた。黄色いバスタオルをターバンみたいにくるくると頭に巻いている。「なにが良いかな？ ビール？ それともワインにしとく？」

「ビールで良いよ」空き缶をテーブルに置いて、ボクは言った。

ウズメは微笑んだあとに首肯した。彼女の頬にくっついていて粘性を持った液体が、のろのろと移動している。アメーバみたいに。

「じゃあ、私もビールにしようっと」

「それが良い」

「なんのこと？」

ボクは首を竦めるだけで、ウズメに反応する。

「もう。セトは、肝心なときにはなにと言わないから」

「その必要がないからだと思うけれど」

「セトには必要なくてもね、私には言葉にしてほしいことがあるんだよ」片目を細めて、ウズメは唇を尖らせる。不思議な表情だな、とそれを見てボクは思った。

「ウズメには、わかっていても？」

ウズメは無言で頷く。

「考えておくよ」ボクは言った。

「本当に？」

ボクは無言で頷いた。それでウズメは機嫌を直したみたいで、ボクに見せていたあの不思議な表情を笑顔に変換した。そのことに罪悪感を覚えていたのは、他でもない、ボクが彼女に嘘をついたからだ。ボクに残されている時間は僅かだ。その間に、彼女の希望に添える機会はないと思う。

「なにか食べものは？」ぼうっとしているとき、上からウズメの声がした。「簡単なものならすぐに出せるけど」

「今から作るの？」ウズメを見上げて、ボクは尋ねる。

「レンジに入れて待ってるだけ」ウズメは前屈みになって、ボクの鼻先を白い指で軽く押した。彼女なりのジョークらしかった。ボクは短く鼻息を漏らしたあと、苦笑を返す。

「なあに？ インスタントじゃ不満？」

「いや、そうじゃないよ」ボクは首を振った。わかっているくせに、とは口にせず。「手伝うよ」

「え、別に良いよ。レンジに入れるだけだから」

「じゃあ、一緒に待ってるよ」

ウズメは何度か瞬いて、それから唇を噛んで微笑んだ。「じゃあ、二人でビールを飲みながら一緒に待ってよう」

ソファから腰を浮かせた。

ラジオは、パーソナリテイからディスクジョッキーに入れ替わっている。アグレッシヴなロックがリビングを包んでいた。それと、コーヒーの中に潜んでいるようなディスクジョッキーの濁った声があるときどき。

「こういうのが好みなの？」

「さあ、どうだろう」ボクは肩を竦めた。「気がついていたらそれが流れていたよ。さっきまでニュースを聴いていたんだけどな」

ウズメは短く相槌を打っただけで、あとはなにも言わなかった。

ボクも黙って彼女のあとに続いてリビングを出る。

「怖いよね」リビングを出て、突然ウズメは言った。思わずボクは立ち止まり、なにが？ と尋ねる。「ニュースで思い出したんだけど、最近この街でおかしな事件が起こってるって」

「事件？」

「うん。セトもニュースを聴いていたなら知ってると思うけれど、殺人事件。今日も殺されたらしいよ」

今日も殺されたらしいよ。そのウズメのフレーズで、ボクは理解する。つまり、さっき聴いたあのニュースはこの街で起こった事件らしかった。三人目の被害者。連続殺人。確かに、怖いと形容でき

るものだけれど、おかしいとまではボクは思わなかった。

「ネットの掲示板でも凄い騒ぎようでね」そのボクの疑問に応えるように、ウズメは言葉が続ける。「騒ぐのは別に良いんだけど、つて良くないか。まあ、とにかく、そこで、うん……、変な噂が流れているの」

つまり、その噂が起因した上での、おかしい事件ということか。

どんな噂なのだろう、とボクは思考を巡らす。それと同時に、事件のことを考えているボクに、多少なりとも驚きを覚えた。ラジオで聴いていたときには大して関心はなかったけれど、ウズメの声に乗せられた途端、靴底に貼りついたガムみたいに気になりだしたからだ。

ウズメに噂のことを尋ねようか否かと、ボクは逡巡する。だけど、結局、彼女に尋ねることはしなかった。どちらにせよ、その事件を考察する時間はボクにはない。

それっきりその話はそこで途切れて、ボクとウズメはキッチンへと這入る。湿った温度が空気を泳いでいた。くすんだクリーム色の冷蔵庫が押し殺したような声で唸っている。カウンターは綺麗に掃除されていた。その上で洗いざらしの食器がモデルみたいに整列している。テーブルは正方形で、白いクロスが寝ている熊みたいに広がっていた。あとは、花が飾られていない花瓶が一つ。

「座ってなよ」

ウズメの指示に従って、ボクは椅子に腰掛けた。

episode 1..6

「とりあえず、ピザとピラフがあるけれど」

「じゃあ、ピラフで」

冷蔵庫と相対していたウズメは、おもむろに中からパッケージを取り出す。カウンターへ向かって歩きながら、パッケージを裏返したり掲げたりしている。もしかしたら、パッケージに隠された秘密のメッセージを探しているのかもしれない。

カウンターの隅にその装置はあった。ウズメは電子レンジの中にパッケージを入れる。古いタイプのレンジみたいで、じいじいとタイマーが音を立てて移動している。電磁波が照射されて中はオレンジ色に灯っていた。女のお腹の断面図を想像したボクは、酔っているな、と自己評価。

「ステレンスとプラスチック、どちらがお好み？」缶ビールを手にしているウズメは、そんなことをボクに訊ねる。

「なんのこと？」当然、ボクは訊き返す。

「スプーンのことだよ」そう言うってからウズメはビールに口をつける。

「正直に言うと、金色のスプーンを出してくれるのかな？」

ウズメはビールを口につけたまま笑い声を漏らす。彼女の籠もった笑い声が缶の中で反響していた。彼女もボクと同じで、酔っている様子。わかりやすいジョークだっただけに、反応は芳しくないと思っていたけれど。

「どちらでも良いよ」ボクも笑って、残っていたビールを空にする。「勝手に取って良いよ」ウズメは言った。でも、スプーンのことではないのは明らか。彼女は既に食器をトレイに載せていて、電子レンジの中の料理を待っている。

ボクは立ち上がって冷蔵庫まで歩いた。中を覗いてからビールを取り出した。アルミニウムの中で澄ましているやつを二本だ。それ

からまたテーブルへと戻る。ボクが戻ってきたときにはウズメは座っていて、ピラフを小皿に盛りつけていた。

「ありがとう」ボクを一瞥してから、ウズメは作業を続ける。

ウズメに缶ビールを手渡して、ボクも椅子に腰を下ろす。

「さあ、食べて食べて」

ウズメに言われるがままに、ボクはピラフを食べる。スプーンはプラスチック製のものだった。ボクが食べている間、彼女はビールを飲みながらボクを見ていた。昼間と同じシチュエーションだ。違うのは、そう、彼女がビールを飲んでいくくらい。

「どう？」

「スプーンのこと？」

ウズメは大笑いした。ジョークを言ったつもりはないのだけれど、それが彼女にはおかしかったらしい。そうではなくて、ボクは本当に、彼女がスプーンのことを訊いていると思ったのだ。ステンレスかプラスチックか、どちらが良いか彼女が訊いてきたから。そう訊いてくるにはなにか意味があるのかもしれない、と考えたからだ。つまり、物事の順番に沿ってボクは口にしただけに過ぎない。

だけど、ウズメが訊いてきたところで、例えばそれがスプーンにするピラフにしろ、彼女を満足させるような気の利いた感想は浮かばなかった、と思う。事実、ボクは口にしただけで、スプーンには関心がない。それを視認して、プラスチックのスプーンだな、と思うだけだ。ピラフにしたって同様だ。租借して、胃袋へ流し込んで、そういうばさつき食べたのはピラフだったな、と思い返すくらいがせいぜい。

「美味しいよ」ボクは言った。テーブルの隅に追いやられた花瓶みたいに、中身がない言葉だな、とボクは思った。

「スプーンが？ それともピラフのこと？」

ボクは短く鼻息を漏らした。

「怒った？」

「いや、怒ってないよ」ボクは笑って、ビールに口をつける。

ウズメは、ボクに言葉が足りないと言った。正確には違うけれど、ニュアンス的には同じようなものだろう。

どんな些細なことでも、人間は思考を言葉に変換してもらいたがっている。言語をコミュニケーションの手段として用いているからには、しかたのないことだけれど。それにしたって、こうもレスポンスを欲しがっているのを見ると、人間の主食は実は言葉なのでは？ と勘違いしてしまいそうになる。

実際、ウズメはピラフをあまり口にしていなかった。ビールを唇に何度もつけて、じっとボクが食べているのを眺めている。ボクはボクでさっきのつまらない感想を言ったきりあとは黙っている。

黙ってボクはピラフを食べていて、ウズメは黙ってビールを飲んでいる。

こんな状況で彼女は言葉を待っているのだろうか？

それとも、言葉じゃないなにかを待っている？

ふと、彼女にキスでもしてやろうか、と思った。

言葉ではなく、

言葉を繰るツールで、

彼女の唇を塞いでやろうか、と考えた。

それなら、言葉はいらないだろう？

それなら、なにかを待っている必要はないだろう？

苦笑。

それから声に出して笑った。

「どうしたの？」

「いや、なんでもないよ」

考えがまとまらない。いや、一体ボクはなにを考えているかわからない。

ああ、やっぱり酔っているな、と再認識。

ボクも、

それから彼女も。

episode 1..7

テーブルの花瓶はカウンターに移されていた。その空間を埋めるようにして、空になったビールがそこに数本立っている。どれもひしゃげていて酷いものだった。原型を留めているのはどこにもない。かろうじて原型を留めているのはフローリングに転がっているやつが二本。でも、結局は、蹴られてしまいか踏み潰されてしまうかのどちらかだ。

あえてどちらが良いかと問われれば、ボクは間違いなく前者を選ぶ。蹴られてしまえば損傷は少ないだろうし、そこから消えてしまったような、初めから存在していないような、そんな錯覚を覚えられるからだ。

だけど、踏み潰される方は悲惨だと思う。ビルから落下したように中身を出して、かつては形になっていたという残滓を辺り一面に曝してしまうからだ。それは見る者の思考にねっとり焼きついて、しかもガソリンみたいに脳に染み込んでしまうから、取り除くのはなかなか難しい。

ウズメはボクのことばかり話していた。勿論、今ここにいるボクではなく、以前のボクの話だ。ボクは、ビールを少しずつ飲みながら彼女の話を聞いている。まるで、舞台の下から眺めているような、現実から乖離しているかのような、そんなぼんやりとした気分を覚えていた。つまり、それがボクという認識がまったくない。それは、以前の記憶がないボクには当然のことだけれど、彼女が話しているボクは、ボクが認識している人格そのものではなかった。例えるなら、ボクという仮面をつけたボクではない生きもの。

そいつは、ときにはボクに限りなく漸近した思考を持っていたり、ときには捉えようのない複雑な思考を持っていたりする。彼女の話が変わる度に、そいつの、いや、そいつらの仮面も変化しているのだ。同一の仮面は存在しない。要するに、現れるのは一度っきりで、

現れたら最後、そこで完結してしまう刹那的な状態だと言えた。これはボクが想像していた通りに、アマカセ・セトが生と死の循環を繰り返している証明になる。

記憶を失うことは死んでしまうのと同義だ。

だから、ボクは毎日死んでいるようなもの。

でも……、完全には死に切れない。

蹴られたみたいに消えてしまうことはない。

オイルみたいに思い出に染み込んで、

幽霊みたいに思い出に漂い続けている。

きつと、

ウズメの頭の中は、

踏み潰されたみたいなボクの残滓でいっぱいだろう。

明日になればボクもその仲間に這入る。

ボクの仮面をつけた、

ボクではない生きものとして……、

彼女の中で漂い続けるんだ。

ボクは寝室に戻った。ウズメはキッチンに残って片づけをしている。手伝う旨を彼女に意思表示したけれど、やんわりと断られた。壁に掛けられている時計で時刻を確認。分針は地上に向かって伸びていた。時針は遙か上空。傾いた姿勢のまま上昇している。天国までもう少ししてところ。秒針は忙しそうに回転しながら、そんな二つの影をレーダみたいに捕らえ続けている。

シャツを脱いでベッドに這入った。つけっぱなしのラジオは窮屈そうにブルースをひりだしていて、その音楽に攪拌された秒針の音がまるでノイズみたいに聴こえる。なるほど、要するにボクは気になっていくというわけだ。だけど、気になったところでどうにもならない。ラジオじゃないんだから、そう簡単に周波数を変えたり電源を切るわけにはいかないのだ。そんなことをしたって流れを止めることできない。いつだって時間は人間の意志を顧みずに進み続けるのだから。

スリッパとフローリングが擦り合う音。ラジオが止まって、そしてベッドが軽く軋んだ。ボクは横になってウズメを見上げる。黄色いタオルは取られていた。黒い髪に反射している照明の灯りが不思議なコントラスト。

「もう寝た？」ウズメは訊く。

「いや、まだだよ」ボクは応えた。

「そう、良かった」それからウズメはくすりと笑う。「約束、忘れていたよ」

「ボクはいつも忘れているよ」

「そうだね。いつも、全部、いつだってそう。どうしてこんな人好きになっちゃったんだろう」

「ごめん」

ボクは時計を見た。

「ねえ、セト。私のこと、好き？」

ボクは黙っていた。

ウズメは振り返ってにつこり微笑む。「セトは優しいね」

もうすぐ消えてしまうのに、うん好きだよ、だなんて言えるわけがない。

それが優しいって彼女は言うけれど、どうだろう、ボクには良くわからなかった。

しばらくボク達はなにも喋らなかった。時間を進めている秒針の音だけが静かに寝室に響いていた。時計は既に天国を通り過ぎていく。こうして古い生命は新しく生まれ変わったってわけだ。もうすぐボクもそうなる。

おどおどと緩慢に進む分針が、その予感。

おどおどと緩慢に進む分針が、ボクの具現。

なるほど、怖いと思う感情……、これが死か。

確かに、ボクは死ぬのが怖い。

記憶を失ってしまうのが怖かった。

キッチンで転がっていた空き缶を思い浮かべる。

ふと、耳元で微かな息遣い。

ウズメがボクを見つめていた。

いつの間にかボクと一緒にベッドで横になって、唇を結んで、そこから声を漏らしている。しだいにそれが鮮明になってきて、ようやくボクは声が音だと、音が唄だと認識する。

瞼を閉じた。

「忘れたくない」

自然とそんな言葉が漏れる。

ウズメの手のひらがボクの頬に触れた。

相変わらず、彼女の手のひらは冷たい。

頬に伝う体液は相対的に温かい。

だけど、

そんなことを言葉にしても

そんなことを涙に変換しても、

それすらもボクは忘れてしまうだろう。

優しいね。

多分、それは本当の優しさじゃなくて、ウズメの中に残らないのが本当の優しさだと思う。そう、ボクは忘れてしまうけれどウズメは忘れることはないのだから。

キッチンで転がる空き缶を思い浮かべる。きっと、今頃はビニール袋の中で潰れたやつと一緒にになっているだろう。蹴られないまま、踏みつけられないまま、袋の中で押し潰されているに違いない。どうせ死んでしまうのなら、なにも残さずに消えてしまいたい。

踏みつけられて跡を残すよりは、蹴られて消えてしまった方が良い。

袋の中で留まっているよりは、

ウズメは蹴ることはなかったと思うけれど、

どうか神様、

ボクを殺すなら、

どうかボクを、

蹴り殺して下さい。

そうすれば、ウズメの中でボクはいなかったことになるだろう？
ねえ神様……、

ボクは間違っているか？

episode 2..1

微かな息づかい。

上半身を起こそうとしたけれど動かなかった。

両肩に負荷を感じる。

柔らかい手の感触だ。

ボクは彼女の名前を囁く。

返事はなかった。

女の静かな息づかいだけが繰り返されている。

眠っているのだろうか？

ボクはゆっくりと瞼を開く。

真昼の太陽みたいな位置に女の顔があった。

彼女ではない。

知らない女だった。

「生きていたんだ？」女が訊く。

「みたいだね」ボクは応える。唇が微かに持ち上がっているのが自分でもわかる。「もしかして、待てなくてボクを迎えに来たとか？」

無言でいることで女はボクに応えた。さっきの女の発音はまるつきり抑揚が喪失していたから、人間ではないと思っていたけれど。

視線だけを動かして辺りを見る。ボクと女以外には誰もいない。

右肩に白い指が根っこみたいに貼りついていて、そこから細い腕が伸びていた。左肩も同じような状態だろう。見るまでもなかった。

要するに女はボクの上に乗っているのだ。

女の皮膚には体温が感じられない。まるで幽霊にでも触れられている感じ。だけど、両肩の圧力と上半身に掛かる彼女の体重はやけにリアルだ。少なくとも、これがボクの妄想でないのは明らか。

時間を確認したかったけれど、かろうじて時計の形が視認できるだけで、あとはブラックホールみたいに暗くてわからなかった。

試しに彼女の名前を思い出してみる。

名前はすぐに思考に浮かんだ。

尾長鳥の尻尾みたいに結ばれた髪。

猫みたいな大きな目。

冷たい。

ボクの手を握る彼女の手のひら。

唄。

僅かに開かれた彼女の唇。

鼓動。

身体中の皮膚に伝播する彼女の体温。

彼女を定義している記号がしだいに鮮明になる。

なるほど確かにボクはまだ生きている。

日付けはまだ変わっていない、恐らく。

視線を元に戻して女を眺める。

女は相変わらず澄ました表情でボクを見下ろしていた。動いているのは、ときどき思い出したように瞬いている睫毛と、彼女の中で収縮している小さな鼓動くらい。あとはマネキンみたいに静止している。

女が彼女ではないのは明らか。

だけど女は、死神でもなければ天使でもない。

女の指が、ボクの肩から剥がれる。

ボクに漸近していた顔がしだいに離れていく。

黒髪がボクの皮膚を這う。

白い指が皮膚の上を滑らかに移動している。

思考は霧みたいにぼんやりしていた。

ふと、胸に違和感。

見てみると、女の人差し指が胸の真ん中に停滞していた。

「傷跡が見当たらないわ」女が言った。「それすらも忘れてしまったの？」

その瞬間、

胸に衝撃が伝わって、

鉄の匂いが鼻腔をくすぐって、
身体が跳ね上がるような錯覚、
女の手が胸に埋まる妄想、
心臓に触れられているような痛覚、
思考を驚づかみされたかのような焦燥、
そして、
女の匂い、
血液と混じって、
身体中に循環する女の匂い。
ボクは手を伸ばして女の頬に触れた。
そこで女は初めて笑顔を見せた。
どこかで見たような笑顔だった。

episode 2..2

真昼の太陽みたいな位置にウズメの顔があった。

ウズメの頬に当てられているのは、そうボクの手だ。ボクの手には彼女の手のひらが重ねられていて、ちょうどバンズに挟まったパティミたいに大人しくしている。このままレンジに入れたと思うくらい彼女の手は冷たかったけれど、見下ろしている彼女の微笑はとても心地が良くてボクをベッドから剥がしてくれそうにもない。寝室は仄かに暖かい。ときどきウズメの頬に光が差していて灯台みたいに明滅を繰り返している。

「どうしたの？」ウズメはくすりと笑って、横目でボクの手を一瞥する。「もう朝だよ。ぼーっとしてないで、一緒にコーヒードも飲もうよ」

ウズメの頬からボクは手を剥がして、おもむろに上半身をベッドから起す。それから窓を見た。閉じられているカーテンがゆらゆらと揺れている。カーテンに透過しているプラチナ。隙間から漏れてくるひんやりとした風がボクの頬を撫でている。壁に掛けられている時計へ視点を移動。それからまたウズメへ視線を戻した。彼女はベッドに両肘を置いて、両方の手のひらを花みたいな形にさせてそこに顎を載せてボクを見上げていた。

「朝だよ」ウズメが囁き掛ける。まるで聞き分けのない子供を諫めるような母親みtainな声調。

ボクは首を竦めてから首肯する。

「コーヒード飲むでしょ？」そう言ってウズメはベッドに腰掛けてから、キャビネットに載せられているコーヒードカップに手を伸ばした。「ありがとう」ウズメからカップを受け取る。

「どうしたの？ それ……」

「えっ、なんのこと？」

長い睫毛を瞬かせてウズメはボクを見つめていた。正確にはボク

の胸の辺り。しばらく彼女はそこをじっと見ていたけれど、ボクがカップをキャビネットへ戻そうとしたとき、彼女は腕を伸ばしてボクの胸に手のひらを当てる。

ウズメの手のひらが緩慢に下へスライドする。彼女の手のひらは冷たいのに、どうしてかそこは熱を帯びていていた。手のひらの移動と相対して熱もしだいに伸びていく。スリット状の模様が見えた。まるで魔法みたいだ。

「大丈夫？」手を離してからウズメは訊いた。

「多分」胸の模様の眺めながらボクは応える。痣だろうか？ 少なくともウズメに引っ搔かれたものではないのは確かだ。

「ベッドの角にでもぶつけたの？」ウズメは首を横に傾ける。ジョークのつもりだろう。しかし顔は笑っていない。

「キャビネットの角にでもぶつけたんじゃないかな」僕は微笑んで、そうおどけてみせる。「大丈夫だよ。痛みはないから」

「そう、それなら良いけど」ウズメの手が離れた。

「その内消えてなくなると思うよ」肩を疎める。それから手に持っていたカップを唇に押しつけた。それは待ちくたびれて機嫌を損ねていたみたいだ。少しだけ苦い。

ボクが少しずつコーヒを飲んでいると、ウズメがベッドに這入り込んできた。背中を向けた彼女はボクの上に乗ろうとする。ボクは脚を昆虫みたいに折り曲げて、彼女のためにスペースを作った。ボクの胸に彼女は凭れ掛ける。彼女の黒髪が胸をくすぐった。尾長鳥はまだ眠っているみたいだ。きつと朝に弱いやつなのだろう。

キャビネットにあるカップを彼女に手渡した。微笑。

「ありがとう」そう言ってウズメもカップに口をつける。

しばらくボク達は大人しくしていた。とにかく、考えることが多い。だから、この沈黙は思考を働かせるには最適だったと思う。だけど、ボクはのんびりコーヒを飲んでいただけで、結局なにも思い浮かべることはなかった。

ラジオから古典的なポップスが流れている。ウズメはいない。ボ

クはベッドに座り直してから脚を伸ばす。彼女が置き忘れた体温がジーンズ越しに伝わった。つまり、これが記憶するということだろうか。彼女の残滓を感じながら、ボクはぼんやりそんなことを考えていた。

episode 2..3

ウズメはキッチンにいた。

「外にいるよ」ウズメの背中に声を掛ける。勿論、煙草を吸いたかったためだ。

ウズメは意味ありげにボクを一瞥しただけで、あとはなににも言わなかった。ハミングをしながら彼女はフライパンを温めている。しばらくその様子を眺めていたら、彼女はおもむろに手のひらでテーブルを示した。テーブルの上にはビニール袋がある。所々に出っ張りがあって苦しそうに傾いていた。まるでエイリアンに寄生された人間みたいだ。つまり、これでボクに外出許可が下りたというわけ。テーブルに近づいてビニール袋を取る。中でアルミニウムのぶつかり合う音。きつとこの中にはフロリングに転がっていたやつも混じっているに違いない。潰されているのは容易に想像できた。だったらせめて、箱の中の暗がりになれ込ませて、蓋を閉じて、消えてしまったんだと、そんな妄想をするのも捨てたものじゃない。

地上まではエレベータを使った。非常階段のある裏の駐車場へ回る。殺虫灯の傍にゴミ置き場があった。貝殻みたいに蓋を閉じている箱の隣に、プラスチック製の長方形が見える。要するに専用の棺桶ってやつだ。そこに空き缶を棄てて煙草を口にくわえた。火をつける。深呼吸。それから煙りを吐いた。煙りを目で追っていたら蛾を見つけた。殺虫灯にしがみついている。

指で殺虫灯を軽く揺らす。蛾は紙飛行機みたいにふらふらと地上へ落下している。まもなく蛾は地上へ接触。コンクリートの上で綺麗な死体になっていた。

「なにを見ているの？」

その声にボクは振り返る。

女の子がボクを見上げていた。

「ねえ、なにを見ているの？」女の子はにっこりと微笑んでから、

もう一度ボクに訊ねる。

「蛾だよ」ボクは応えた。

「死んでいるわ」蛾を見下ろして彼女は言った。「これからどうするの？」

「どうもしないよ」

「そう」女の子は首肯してまたボクを見上げる。「コノハナ・サクヤ」

ボクが黙って首を横に傾けると、女の子は片眉を上げてボクを睨みつけた。多分、怒っているのだろう。意味がわからない。その不可解さがボク少し苛立たせた。

「私の名前よ」女の子のその言葉でようやく理解した。

「アマカセ・セト」煙りを吐き出したあとでボクは言った。

「よろしく、アマカセ……」女の子は下唇に人差し指を当てて、首を傾げる。「セトって呼んで良い？」

「構わないよ」

「ありがとう。優しいのね。最近ここに越してきた人かしら？」

「違うよ」

「そう」女の子はにっこりと微笑んで首肯する。「じゃあ、友達か恋人のところに遊びにきたのね。あまり見かけない人だったから、つい声を掛けてみたの。悪く思わないでね」

「悪くなんて思っていないよ」

「そのわりには苛々してそうだけど？」目を細めて女の子は悪戯っぽい表情を作る。

「どうしてわかる？」

「ほら苛々してる」女の子はくすりと笑った。「さっきから一言しか喋っていないし、発音もなんだか刺々しいわ」

「そうかな？」

「そうよ」

「多分、煙草を吸っているせいなんじゃないかな」ボクは女の子に首を竦めてみせる。それから深呼吸。「きつと、ニコチンを肺に入

れているせいだよ」

「苛々しているのは、どうして？」

「ニコチンが足りないからじゃないかな」

「煙草を吸っているのに？」

「そう、煙草を吸っているのに」コンクリートの上に煙草を落とす。そして煙草を靴底で揉み消してからそれを拾い上げた。「悪かった。謝るよ。正直、少しだけ苛々していた」

「もしかして、朝が苦手なのかしら？」

「どうだろう」ボクは応える。「苦手というより、寧ろ慣れていないのかもしれない」

「不思議な人ね。まるで朝を知らない人間みたいな台詞」

別に知らないわけじゃないさ。

夜を経過して朝を迎えたことに少しだけ戸惑っているだけ。

本当だったら今頃はコンクリートの上にいる蛾のようにボクはなっているはずだった。

昨晚の記憶も拡散して消失するはず。

なのにボクはこうして生きていて、昨日のことも覚えている。

「面白い人。また会えるかしら？」

気がつく女の子がボクに漸近していた。上目遣いでボクを見ている。

「また会えるかしら？」女の子は言った。彼女の黒髪から微かな薫りが漂っている。一瞬だけ鉄の溶ける匂い。それから人工的な彼女の薫り。

ボクが応えあぐねていると、女の子はあなたは正直だわ、と言ってくすくす笑い出した。それから彼女は回れ右をしてワンピースの裾を持ち上げる。

「また会えるような気がするわ」

「君は預言者なのか？」

「やっぱ面白い人」女の子は手を叩いて笑った。勿論、ジョークを言ったつもりはない。「あなたのその痣、彼女につけられたんじ

やないの？」

女の子の視線を目で追う。彼女の視線の先にはボクの胸元がある。ボタンを外している箇所から皮膚が覗いている。

否定する暇もあたえずに、女の子はボクと距離を置いた。彼女の片脚は非常階段のステップに載せられている。次に会うときには朝に慣れていると良いわね。彼女はそう言って非常階段を駆け上った。その様子を、ボクはうわの空で眺めていた。

episode 2..4

「ある日、自分が魔法を使えることに気づいて、その魔法が人を幸せにできるものだったとしたら……、君ならどうする？」

唐突に、なんの前触れもなく、ウズメはボクに訊いてきた。あまりに突然だったものだから彼女の言葉を理解するのに少しだけ時間が掛かった。思考にはワインの澱みたいにさっきの話題が底に残っている。さっきまでボク達は昨夜の蛾のことについて話していたはずだった。コノハナ・サクヤという少女がアパートの中に消えたあと、ボクはもう一度、殺虫灯の真下のコンクリートを見た。死んでいた蛾は一匹だけだった。ボクが振り落としたやつだ。本当なら死体はもつとあるはず。帯電した灯りに寄ってきたのはなにも一匹だけじゃない。そのことを彼女に話したら、誰かが片付けたんだよきつと、と彼女は言った。ボクは蟻が巣へ運んだものだと思っていたけれど。だけど、ボクにしろ彼女にしろ現実的な答えであることには違いがない。そこに魔法だなんて幻想じみた言葉を想起するキーワードは、皆無だ。

ボクをやりわりと見据えているウズメを眺めている内に、そういえば食事中だったな、と思い当たる。さっきまで、小鳥みたいにサラダを突いていた彼女のフォークは空中で停滞していた。今朝はステンレス製のものを使っていた。キッチン照明と窓から漏れている明かりがフォークをきらきらと輝かせていて、ボクの淀んだ思考を洗い流しているような気がする。つまり、フォークが宗教的なまでにセクシーだってことをボクは言いたいわけ。

「ごめん」ボクはフォークを小皿に載せて、手のひらをウズメに見せる。「食事中にするような話じゃなかったね」

「え？ なんのこと？」ウズメは眉を顰めてから首を傾げる。

「なんでもないよ」ボクは微笑んでからコーヒークップに手を伸ばした。「それで、なんだっけ？」

「もう」唇を尖らせて、ウズメはボクを睨んだ。

コーヒーを飲みながら、ボクは再びウズメの話を聞く。コーヒーは相変わらず苦かった。だけど、悪くはない。そのおかげで思考はしだいにクリアになっているし、ウズメのファンタジーにつき合う余裕もできてきた。

「多分、使わないと思う」カップをテーブルに置いてから、ボクは言った。

「どうして？」

「自分が認識している幸せが他人に適用するとは限らない。自分がそれを幸せなものだと思い込んでいるだけなのかもしれない」

「ああ……」短く息を漏らして、ウズメはフォークを小皿に載せる。それからテーブルに身を乗り出して、片肘をついてからそこに顎を載せた。「他人にとってその魔法は、幸せを与える魔法じゃないかもしれないってこと？」

「そう。例えば……、ウズメはチョコレートが好きで好きでしかたがない」

「そうでもないよ」

「例えばの話だよ」ボクは微笑む。「その気持ちを君は他人と共有したくなるんだ。それで、ウズメの目の前にボクがいる。だけど、ボクはチョコレートが嫌いであつたがたがない」

「そんなに嫌いなのか？」ウズメは微笑んだ。

「そうでもないよ」ボクは笑って応えた。「それで……、ウズメはボクがチョコレートが嫌いなのを知らないんだ。そうだとすると、君ならボクにチョコレートをあげるか？」

「あげると思うよ。だって、私が好きなものなら他の人も好きなんじゃないかな、って思うもの」

「じゃあ、ボクがチョコレートが嫌いなのを君が知っていたら？」ウズメは応えなかった。頬杖をついたまま、黙ってフォークでサラダを弄っている。

「幸せってのは不定なんだよ」ボクは言った。「それが不定である

以上、ボクはその魔法は使えない。ボクは臆病なんだ。仮に、もしそれが普遍的なものだとしたら、ボクなんかじゃなくて。とつくに神様が広めていると思うよ」

ボクは肩を竦めてから、トーストに手を伸ばした。ナイフでバターを掬う。

「セトは迷惑なのかな？」頬杖をついて、俯いたまま、ウズメは言った。

「なにが迷惑なの？」ボクは訊き返した。だけど、ウズメは応えない。

ナイフをトーストに当てる。

「私と一緒にいて、君は、幸せじゃない？」

「まだわからない」正直な感想だった。「でも、魔法を掛けられるのはまんざらでもない」

「どういうこと？」ウズメはボクを見据えて首を傾げる。

「幸せな人間を見るのはまんざらでもないってこと。ボクがチョコレートが嫌いでも、君がそれで幸せになるのなら、ボクはあえてそのチョコレートを貰うよ」手に持っているトーストを眺める。バターがアメーバみたいに広がってトーストへ溶け込んでいた。「それに、幸いにもボクはチョコレートがそんなに嫌いじゃないんだ」

ウズメはそこでようやく顔を上げた。

泣いているような、笑っているような、そんな複雑な表情を見せて、ボクを見ていた。

要するに、既にボクはウズメに魔法を掛けられていたってわけだ。だからこそ、こうしてボクはウズメの前にいる。

それは、今日のボクではなく昨日のままのボクだ。それが幸せかどうかなんて、ボクにはわからない。

きつと、神様だってわからないはず。

でも、ウズメが幸せならそれで良いと思う。

つまり、彼女を幸せにする番がボクに回ってきたということ。

「だから、ウズメはボクに魔法を掛け続ければいい」そう言っ

ら、ボクはトーストを齧った。

ウズメの頬を横断しているやつもこんな味なのかもしれない。

episode 2..5

「コーヒーのおかわりは？」

「もう充分」

ウズメは頷いたあと、コーヒーカップをトレイに載せた。ボクは腕を伸ばしてシャツのポケットから煙草の箱を掴んだ。だけど直ぐに思い直してテーブルの下に手を引っ込める。ボクの右手は太ももにそっと触れていた。きつと淋しい右手に違いない。常になにかに触れていないと落ち着かないのだろう。苦笑しながらボクはそんな評価をする。

トレイを持ってウズメはカウンターへ向かった。僕もトレイに載せきれなかった食器を持ってカウンターへと運ぶ。

ウズメは薄く微笑んで、ボクから食器を受け取る。シンクに水が落ちる音。かちかちと、音を立てながら食器が擦れ合っている。作業をしている彼女の背中を、ボクはぼんやりと眺めていた。

「リビングでテレビでも見ていると良いよ」ウズメの背中越しに、くすりと笑い声が漏れる。「それよりも外の方が落ち着くのかな？」

「誰が？」

「君の右手が」

ボクは短く鼻息を漏らした。「ちょっと出てくるよ」

キッチンから出ようとしたら、ウズメに肩を掴まれた。痛みはない。でも、脚を止めるには充分な圧力。振り返ると彼女の顔がボクに漸近していた。上目遣いにボクを見ている。肩を掴んでいた彼女の右手はボクの頬に当てられていた。誰もものだって、その右手は淋しいのかもしれない。

「もう少しだけ待っててね」瞼を閉じてウズメは唇を押し付ける。

「なにを？」唇を離してからボクは尋ねた。

ウズメは目を開けて、それからポケットにある煙草の箱を軽く指で叩く。

「忘れたの？」

「いや、忘れてないよ」

「シンクみたいにピカピカのやつを買ってくるから」

ボクは思わず吹き出した。それはステンレスだよ、とは口にせず。もう一度ボクにキスをしてから、ウズメは作業に戻った。機嫌が良いのか、彼女はハミングをしながら食器を洗っている。彼女の唄に合わせて踊っている黒い尾長鳥をしばらく見つめたあと、ボクはキッチンを後にした。

通路を歩いて非常階段の踊り場に出る。さっき出たときよりも外は眩しかった。空は限りなくブルーに近い。付け合わせの野菜みたいな雲が遠慮がちに浮かんでいる程度。太陽は目玉焼きを連想させるのにはうってつけの形。長閑な景色だ。そのまま空を見上げながら煙草を吸うのも悪くはない。そう思って煙草を取り出そうとしたとき、ふと地上で人影を視認した。どうやらステップに座り込んでいるようだった。あとは良くわからない。空を見上げたばかりで、まだ目が地上に慣れていない。ボクは目を瞑ってしばらく待った。目が慣れてきたときには、ボクの気配に気づいたようで彼女は立ってボクを見上げていた。コノハナ・サクヤだ。

「アマカセ・セト！」額に手を翳したまま、コノハナはボクの名前を呼ぶ。「蛾がいなくなったの！ どうしてだと思う？」

ボクは煙草を取り出す動作をしながら言葉を探した。

「地面に溶けちゃったのかしら？」ボクの言葉を待たずに、コノハナは首を傾げてそんなことを言う。なるほど。それは考えもしなかった。斬新な発想かもしれない。

口に煙草をくわえてからボクは階段を下りた。コノハナは眩しそうに目を細めてボクを眺めていた。

「私が言った通りね」コノハナはにっこりと微笑んで白い歯を見せた。「また会えたでしょ？」

「そうだね。ところで、君はこのアパートの住人？」

コノハナは首肯した。それから彼女は片手をステップの方へ差し

出して微かに微笑む。座りなさい、というジェスチャーらしい。彼女の指示に従ってステップに腰を下ろす。ボクに続いて彼女もスカートを押さえながらステップに座った。ボクよりも一段高い位置だ。煙草に火を点けるかどうかしばらく逡巡する。だけど、結局ボクは吸わないことに決めて、口にくわえていた煙草を箱に戻そうとした。

「吸っても平気よ」と、そのとき後ろから声が掛かった。ボクは振り返る。

「汚いものはどれも地面に溶けるの。だから、煙草の煙りも私のところまで昇ってこれないと思うの。きっと神様は綺麗なものを以外嫌いなんだわ」

「死んでいた蛾は汚い？」ボクは訊ねた。

「汚いっていうより怖いわね」顔を顰めてコノハナは言った。「自分の死体を連想してしまいそうで厭だわ」

「そう」ボクは頷く。「話は変わるけど、神様は人間のことを愛しているらしいよ」

「そうみたいね。でも、言葉は全部嘘だってパパは言ってた」

「どうしてそんなことを？」ボクは訊ねた。

「人間が地上にいることに原因があるんじゃないかしら？」コノハナは目を細めてボクを見据える。それから彼女は一瞬だけ空を見上げて、またボクに視線を戻した。今から秘密を打ち明ける、そんな悪戯っぽい笑顔を彼女はボクに見せていた。「だって、ほら、言葉って人間が作ったものでしょう？」

「なるほど」ボクは煙草に火を点ける。「それに言葉は見えない。形になるまえに直ぐ空気に溶けてしまうから」

「それは斬新な発想だわ」

「ありがとう」そうコノハナに言って、ボクは煙りを少しだけ吐き出した。

episode 2..6

「どうしてここに？」煙草を二本消耗したあとに、ボクはコノハナに訊ねた。

「あなたこそ、どうして？」コノハナは小首を傾げて、ボクに訊き返す。

「煙草を吸いに」ボクは言った。

「私も、似たようなものよ」白い歯を見せてコノハナは微笑んだ。

「そんなことよりも、ねえ、私の言った通りになったでしょう？」

ボクはステップに煙草を押しつけたあと、コノハナの表情を窺いながら彼女の言葉の意味を探していた。彼女は微笑んだままボクを見据えていた。

「もう忘れたの？ 昨日のことよ」コノハナはボクを見据えたまま、閉じている両膝に肘を載せて手のひらで花を作って、それからそこに顎を載せる。「まあ、もっともこんなに早く会えるとは思っていなかったけれど……」

「なるほど」ボクは首肯する。「君は、預言者だったわけだ」

「預言者は大げさだけどね」コノハナはボクに優しく微笑み返した。

「思い出した？」

「ああ、ようやく。記憶を辿ることに慣れていないんだ、ボク。もし気を悪くしたなら謝るよ」

「謝る必要はないんじゃない？」肩を竦めてからコノハナはステップから立ち上がった。それから、おもむろに彼女はボクの隣に座る。

「病気なの？」

「病気？ なんのこと？」

「記憶を辿ることに慣れてないって」

「どうだろう……、そういうこと考えたことがないから」

「そう。いつもそんな感じなの？」

「どうしてそんなことを訊く？」

ボクはコノハナに訊き返した。純粹な興味から出た言葉だけれど、彼女はそう捉えなかったらしく、表情を少しだけ強張らせてから咽を小さく鳴らした。

しばらく沈黙が続いた。ボクはまた煙草が吸いたくなって、シャツのポケットに手を伸ばす。だけど、撫でるだけで我慢した。こういうとき優しい言葉を掛けれたなら少しは彼女の表情も和らぐだろうか、とボクは考える。でも、言葉を掛けるには遅すぎるような気もした。結局ボクは右手も口も遊ばせたまま、コノハナが喋りだすまでじっとしていた。

「あなたに興味があるからよ」ようやくコノハナは口を開いた。

episode 2..7

「これで満足？」

コノハナはさらにボクに近づいて、くすりと笑った。ジョークのつもりだったのだろうか？ 笑ったあとの彼女からはなにも読み取ることはできなかった。人形みたいに澄ました表情で、真っ直ぐ前を見据えている。

「右手が踊ってるわ」ボクを一瞥してコノハナは言った。「ストレスを覚えているみたいだけれど……、それって、私のせい？」

「いや、違うよ。いつもこんな感じ。きっと淋しい奴なんだと思う」

「セトが？」

「いや、ボクの右手が」

お腹に両手を当てて、コノハナは小さく笑いだした。ボクは彼女に首を竦めてみせる。少しだけ、親しみを込めた表情を作れたと思う。それからしばらくしてコノハナは、「吸っても良いわよ」と言っ
てボクを一瞥した。正確にはボクの胸の辺り。コノハナの提案に
対して、ボクは首を横に振るだけで彼女に応える。

唇を尖らせてコノハナはボクを睨む。だけど、怒っているふうには感じられない。少なくともなにかを取り繕うとしている表情だとわかる。多分、彼女に気をつかわせてしまったのだろう。ボクは睨
んでいる彼女に微笑み返してから、意識して右手を大人しくさせる
ことに集中した。意識するだなんて、まるで自分の身体じゃないみ
たいじゃないか。

ボクが、どうやったら右手を大人しくさせることができるか、と
考えているとき、コノハナは首だけをボクに近づけてきた。当たり
前だけれど、彼女からは煙草の匂いはしなかった。

「セト自身は淋しくないの？」首を横に傾けてから、コノハナはボ
クに訊ねる。

小首を傾げて見つめているコノハナをボクは黙って見る。そんな

ことを考えたことがなかったので、イエスともノーとも言えない。ボクが黙っていると彼女は突然微笑みを浮かべて小さく頷いた。彼女の中でなんらかの処理が施されたい。それが間違った評価であることが直ぐにわかる。だけどボクにはそれを、否定することも肯定することもできない。データがないのだからそれは当然だ。

「淋しくない人間が、胸に傷痕を残さないものね」

コノハナの人差し指がボクのシャツに進入した。

親指を絡めて器用にボタンを外す。

皮膚にマーキングされた痣が露になった。

コノハナはそこに人差し指を当ててから、それをしばらく停滞させる。

コノハナの指も冷たかった。

もしかしたら、女の指は全てそうなのかもしれない。ふと、ボクはそんなことを考える。

冷たい指先が痣の上を這う。

まるで蝸牛みたいな鈍重さだった。

なぜかその行動に、ボクは既知感を覚えた。

「痛くはないの？」指を離して、コノハナはボクに訊ねる。既知感
は直ぐに消失した。

「痛みはないよ」肩を竦めて、ボクは彼女に応えた。「引っ掻かれた傷じゃないからね」

コノハナは片眉を顰めただけで、あとはなにも言わなかった。

ボクも痣の件に関してはこれ以上補足する気がなかった。ボクが
どう言ったところで、コノハナの中ではなにも変わらないと判断したからだ。

「そろそろ私は戻るけれど……、あなたはもうするの？」そう言っ
て、コノハナはステップから立ち上がる。

「ボクももう戻るよ」

「そう。また会えると良いわね」

「きっと会えるよ」

「それは、予言？」

ボクはコノハナに微笑んだ。

コノハナもボクに微笑み返す。

ボクがステップから立ち上がろうとしたとき、上空から物音が聴こえた。

金属を叩く音だ。

きっと誰かが天国の扉を叩いてるのかもしれない。

上空を見上げる。

ウズメが地上を見下ろしていた。

でも、天国よりは遥かに近い。

ここが地上であることを、ボクは思い出す。

「アマノ・ウズメ！」コノハナがウズメの名前を呼ぶ。「あなたも外の空気を吸いにきたの？」

「違うよ！ そっちの彼に用事があるから出てきたの！」ウズメはにっこりと微笑んだ。「サクヤは休憩しているの？」

「そうよ。相変わらずあそこは空気が悪いから！」コノハナはボクを一瞥して、それからまたウズメを見上げる。「あなたが起因していたのね！」

「え、なんのこと？」

「なんでもない！」

「そう……、まあ、良いか。それよりもサクヤ！ あたなたも一緒にしない？ 朝ごはんまだ食べていないんでしょう？」

「遠慮しとくわ！」コノハナは肩を竦めて、ボクに呟く。「そこまで野暮じゃないわよ、私」

ボクにさよならの言葉を言ってから、コノハナは走り去った。入れ替わりにウズメが階段から降りてくる。

「バーの娘よ」ウズメが言った。「お店の手伝いをしているの。良い娘でしょ？」

「まだ二回しか会ってないから」

「相変わらず正直なんだ、セトは」ウズメがくすりと笑う。「コー

ヒ―冷めちゃった。新しいの淹れるけれど、まだここにいる？」

「いや、一緒に戻るよ」

ボクは右手を気にした。

ボクの右手は、ジーンズのポケットの中にいる。

だから、ボクの右手は大人しい。

けど今の右手が、淋しいのか淋しくないのかは、ボクにはわからない。

episode 2..8

気がつくとボクはひとり。

どこか知らない場所で煙草を吸っている。

辺りは真っ暗で、まるで深海に潜んでいるみたいだった。

唯一の光といえば、口にくわえている煙草の光くらい。他にはなにもない。煙草はアンコウみたいにぼんやりと淡い光を放っていたけれど、それに惹かれて近づいてくる生物の気配はなかった。

どうしてだろう？

ここにはボク以外に生物がないから？

それとも、ボクが危険であることを既に知っている？

他にも色々な考えが浮かんだけれど、結局答えは見つからない。

ボクは考えるのを止めて、煙草を地面に擦りつけて、新しい煙草を箱から一本取り出す。オイルライターの蓋を開く。フリントとフリントホイールが擦れ合う摩擦音。煙草に火を点ける。だけど、オイルライターの炎は空中に停滞させたまま、闇の中で蠢く炎をぼんやりと眺める。揮発したオイルの匂いがしないのが不思議だと思った。しばらくボクはオイルライターの蓋を開いていたけれど、やがてそれに飽きて蓋を閉めて炎を消した。

煙草の先端で淡い光が明滅を繰り返している。近づいてくる生物はいない。煙ですらボクから離れたがっているみたい。ときどき煙草の光に反射する煙りは、海月みたいにゆらゆらと上昇していた。「ひとりでいると淋しい？」ふと、そんな女の声。どこかで聞いたことのある声だった。

「わからないよ」ボクは応える。煙草の先端をぼんやり眺めたまま。で。辺りには誰もいないからだ。気配すら感じられない。

「そう」女はそう言ったきり、あとはなにも言わなかった。

「まだ、生きているの？」しばらくして、別の女の声。

「ああ、生きているよ。まだ、ボクは生きている」ボクは応えた。

「でも、明日になるとわからないな」

女からは返事がなかった。

「どうしてわからないの？」また別の女の声。彼女の質問を理解するのに数秒掛かった。

「明日になるとボクは死んでいるかもしれない。本当は、それが自然なんだ。いつだってボクはそうやってやり過ごしてきた」

「不自然だよ」女は言った。「普通じゃない」

「そうだよ」ボクはくすりと笑ってから女に応える。「ボクは、壊れているんだ」

「いつから、いつから壊れているの？」

いつから？

いつからだろうか……、そんなこと考えたこともない。

ボクが応えあぐねていると、ふと気配を感じた。

ボクの返事をせかす女の声はしない。

彼女も、他の女と同じように消えてしまったのだろう。

ボクはおもむろに気配がする方へ視線を動かす。

そこには誰もいない。

きらきらと光るなにかがそこにあるだけ。

魚みたいなシルエツトだった。

だけど、動いている気配はまったくくない。

金属みたいにじっと固まっている。

辺りは真っ暗でそれを視認できないはずなのに、確かな形でそれは存在していた。

鋭く光る銀色が、ボクに殺意があることを主張している。

だけど、身動きはとれない。

不思議と恐怖は覚えなかった。

ボクがそれを思いだそうとしていたからだ。

ボクは確かにそれを知っていた。

ああ……、

そうだ思い出した。

そいつはピラニアだ。
深海に漂う人喰い魚。

確かにボクはそいつを見たんだ。

そうして、ボクはその夢から醒めた。

ベッドの上で煙草に火を点けようとした。だけど、ここがウズメの部屋であることをボクは認識する。軽く舌打ち。煙草を口にくわえたままでベッドから降りる。時間は正午を少し過ぎたくらい。ウズメはいなかった。

寝室から出て廊下を歩いているときに電話が鳴った。
リビングに這入って受話器を取る。

「はい」

「あれ？ ウズメの声じゃない……」電話の相手はコノハナだった。
「もしかして、アマカセ・セトなの？」

「そうだよ。ボクだよ」

「ウズメは？」

「仕事に出ている」

「仕事？」

「そう、仕事」

「相変わらず気まぐれにやっているのね彼女、まるで猫みたいだわ」
「彼女に用事があるなら、あとで伝えておくけれど」

「彼女だって」コノハナのクスリと笑う声。「ねえ、どこの旦那さまなの？」

「用事がないのなら切るけれど」

「気を悪くしたなら謝るわ。ウズメに伝えておいて、今夜お願いしたいって」

「お願い？ なにを？」

「セト、知らないの？」コノハナはなにかを逡巡している様子だった。電話の向こうでぼそぼそとなにかを囁いている。「ねえ、セト。今夜、あなたもお店に来ない？」

「それは構わないけれど……、どうして？」

「ウズメに訊けばわかるわ。それじゃあ、セト。今夜、楽しみにしているわね」

そう言って、コノハナは電話を切った。

受話器を置いてからソファに座る。

右手をジーンズのポケットに仕舞い込んだ。

ウズメが帰ってくるまでは、まだ時間がある。

コノハナの言葉の意味についてか、ボクが見た夢の意味について考えようか、どちらにしようかとボクは迷った。だけど、いずれにしろ明確な答えは出そうにないだろう。

しばらくソファの上でぼんやりと過ごした。

このままなにも考えずに退屈を凌ぐのも悪くないと思う。

ボクの右手は大人しい。

だったら、ボクも同じようにするのも悪くはない。

episode 3..1

アスファルトから一段上のテラスに脚を載せる。

背の高い老人のように木製の扉がボクを見下ろしている。金属の蝶番にはプラスチックのプレートが掛かっていて、そこに並んでいる文字列がこの場所を訪れるのが早いことを教えてくれていた。ボクはウズメの皮膚に触れるように、そっと扉に手のひらを当てる。ざらざらとしていて心地が良かった。それからしばらくしてその扉を軽くノックする。

空は、オレンジを磨り潰したみたいな色。扉の近くにある殺虫機は機能を停止したまま。だけでもう少し経ったら、そいつもいつものように仕事をこなすことになるだろう。

鍵を外す音が聴こえたので、ボクは辺りを観察するのを止めて扉へと視線を戻した。

「悪いが裏へ回ってくれないか？」扉の隙間から男が顔を覗かせる。「見ての通り、今はやっていない」

ボクは片手を上げて男に応えた。

裏の駐車場へ回ると、男が立っている姿を視認した。白髪を短く刈り上げた背の高い男だった。男の隣には備えつけの灰皿が設置されている。男はボクに気づくと、煙草を灰皿に押しつけてから片手を上げる。

ボクも片手を上げて男に近づく。

「ニニギ」口を斜めにしてから男は言った。「サクヤの父親だ」

「アマカセ・セト」

「そうか。セト、お前煙草は？」新しい煙草を口にくわえて、ニニギはボクを一瞥する。

ジーンズのポケットからオイルライターを取り出して彼に見せる。「化粧が剥がれているな」ニニギは口をますます斜めにしてライターを見る。ボクのライターにコーティングされている金色のメッキ

は所々剥がれている。彼はそれを見てジョークを言っているのだらう。「しかし、良い伴侶だ」

「それに気も利く」ニニギの煙草にボクは火を点けた。

「稀有なこともあるもんだな」煙りを吐き出して、ニニギはボクを見る。

「どういうこと？」

「あいつ、いや……、サクヤは煙草が嫌いなんだ」

ボクが煙草に火を点けようとすると、ニニギは片手でボクを制止した。「こいつも、案外気が利くほうだね」

ボクは黙ってニニギから火を借りる。深呼吸、それから煙りを肺から逃がす。

「彼女の煙草嫌いとボクに一体なんの関係が？」煙草を灰皿で叩いてからニニギに訊ねる。

ニニギは一瞬目を大きく見開いてから、片目を細めてボクを見据えた。

「面白い男だ」にやりと笑って、ニニギは煙草を灰皿へ押しつける。

「まあ、這入れよ」

金属の扉を押し開いて、ニニギはボクを中へ招き入れる。

揮発したアルコールの匂いが鼻をついた。

微かに煙草の匂いもするのわかる。

吸いかけの煙草を灰皿へと投げ入れた。ジュツという、煙草の火が水に触れる音がした。殺虫機を見上げる。殺虫機の稼動する鈍い周波数が響いていた。そいつはお前の獲物じゃないさ、とボクはそっと心で殺虫機に囁いた。

episode 3..2

カウンター越しに店内を見渡した。勿論、客はひとりもない。壁はマーマレードを塗った食パンみたいに黄色く変色していて、ここが随分昔からある場所だということがわかった。壁だけじゃないここには揮発したアルコールの匂いと煙草の匂いが染みついている。天井にあるファンが戦闘機のような獰猛さで空気を攪拌していたけれど、その程度では隠し切れない魔力がここにはあった。ちよつとした圧力をボクは覚えた。

「好きなところに座れよ」ニニギは首でカウンターの向こう側を示す。まるで、ここはお前の場所じゃない、というふうな。「それとも、お前がホストをやるか？」

ボクは無言で首を振ってから、ニニギのいる作業場から出る。そのとき、右手の奥にジュークボックスが置かれているのが見えた。「なかなか、グラマーだろ？」ニニギは目を細めて、口を斜めにする。「それに、良い声で鳴く。試してみるか？」

ボクが首肯すると、ニニギは鼻息を漏らしてコインを投げる。そのコインを受け取りジュークボックスへと歩いていく。ときどき、フローリングからぎしぎしという悲鳴。

ジュークボックスは棺桶みたいな黒色でコーティングされていた。表面は金色で縁取られている。相当使い込まれたものらしい。良く見ると黒色の部分には細かな傷があった。コインを投入する場所はすっかりメッキが剥がれていて、鉛色の金属が剥き出しになっている。

コインを投入してジュークボックスを操作する。しばらくすると、ロックが流れてきた。聞いたことのない曲だ。もつとも、ボクにとっては一度聴いたことのある曲も、結局はそこに行き着くのだけだ。

ジュークボックスから離れてカウンターの席へ向かった。ニニギ

は煙草を吸いながらボクを待っていた。ボクが椅子に腰掛けるのを確認してから彼は冷蔵庫に屈み込む。そこからビールを一本取り出し、棚にあるグラスを手取る。彼が持っているグラスは二つだ。勿論、ボクと彼以外には誰もいない。

「少しくらいなら大目に見てくれるさ」ニギはグラスにビールを注いだ。

「誰に？」ボクは訊ねる。

ニギは両腕を広げて天井を仰いだ。ニギが言ったのは神様だろうか？　もしそうだとしたら、どんなことでも彼なら大目に見てくれるから大丈夫。例えワインを飲んだって、彼ならばきつとなにも咎めはしない。

ビールは良く冷えていた。咽が渴いていたので、ボクはそれを一気にあおった。本当は水のほうが良かったけれどここはバーだ。バーでしかもホストに出された酒を飲まないゲストだなんて、鈴をつけた猫みたいに気が利かない。ニギから二杯目のビールを注いでもらい、ボクは煙草に火を点けた。ニギも黙って煙草を口にくわえる。

煙りはファンに届く前に消えてしまった。プロペラからは低周波の唸り声が聞こえてくる。灰皿はアルミニウムの簡素な製品だ。

「ウズメは？」

ニギの声に、ボクは顔を上げる。ちょうどウズメのことを考えていたからだ。

「時間まで部屋でゆっくりしているって。そのときにサクヤも一緒に来るはずだよ」

「ウズメと一緒になのか？　喋りつかれてそのまま寝ちまえば良いんだがな」

「彼女がここの仕事を手伝うのは、なにか不都合でも？」

「ここはバーで、あいつは子供だ」ニギは煙草を灰皿に押しつける。

「確かに」ボクは首肯する。「だったら、どうして彼女にここの手

伝いを？」

「あいつがそれを望んでいるからさ」

「煙草が嫌いなのに？」

「そうだ。酒はどうだか知らないがな……、まあ、いずれにしろあいつにとってここは最適な場所じゃない」

「それでもサクヤは望んでいる？」

「そうだ」

「どうして？」

ニギは眉間に皺を寄せて難しい表情を作る。わからない、というより、応えあぐねているといったそんな表情だった。ボクは黙って彼の言葉を待った。どうしてサクヤがこの手伝いをする理由を知りたかったのかは、ボクには良くわからない。

しばらく店内にはジュークボックスから流れるロックだけが響いていた。ときどき、音が飛んでいるのはファンのプロペラに捲き込まれているせいだろうか。

「お前、聞いたことがあるか？」ニギはボクに訊ねる。突然だったので反応が遅れた。

「深海ピラニア」黙っていたボクを見据えながらニギは口を開く。

「それを探しているんだ……、あいつは。銀色の人喰い魚を……」

ファンから漏れる低い周波数が鼓膜に残留している。

バーに流れていたロックは停止していた。

episode 3..3

ニニギはボクを見据えたまま黙って煙草をくわえていた。赤い光がじりじりと煙草を消耗させていて、そのまま放っておいたらフィルターまで侵食しそうだ。灰は劣化したコンクリートの柱のようにひび割れて傾いている。ボクはニニギから視線を逸らし灰皿を見る。そのとき、ふと唇が軽くなったような気がした。と、同時に煙たさに思わず目蓋を閉じる。それからゆっくりと目蓋を開く。アメーバみたいに目の前に白い煙がふわふらと広がっている。そういえばボクも煙草を吸っていたつけ、と再認識。唇からフィルターを剥がして、灰皿に腕を伸ばした。

灰皿は酷い有様だった。灰皿の中身は不発弾みたいにあちらこちらに吸殻が散らばっていて、そこから焦げついた煙りの匂いが立ち込めていた。アルミニウムの縁は灰で汚されていて、テーブルまで灰色に染められている。思わず煙草を灰皿に落とすのを躊躇ってしまった。爆弾を抱えた戦闘機のパイロットにでもなった気分だった。これが仕事じゃなきゃ、とてもやってられない感じ。

音楽はブルースに変わっていた。

「前に聴いた気がするよ」

「なんだって？」ニニギは目を丸くする。

「このブルース」ジュークボックスを一瞥してから、ボクはニニギを見る。煙草は指に挟めたまま。なにが始末に終えないかって、吸うのを諦めた煙草ほど始末に終えないものはない。「うん、でも、まあ気のせいだとは思うんだけど」

ニニギは唇を少しだけ上げて、それから口にくわえていた煙草を灰皿に落とした。グラスを手に取り灰皿へと傾ける。灰皿にビールが注がれて、たちまち煙りは消え去ってしまった。

「取り換えてくる」そう言って、ニニギはカウンターへと歩いていく。「まあ、単なる噂だ。忘れてくれ」

以前のボクだったなら、そんな心配いらないよ。そう心の中でニギの背中に囁いて、ボクはもう一度ジュークボックスの方角へ首を向ける。ニギの言葉を聞いたとき、一瞬だけ音が止まった気がする。ロックからブルースに変わったのに気づかなかったからだ。深海ピラニア。まったく聞き覚えのない単語だ。もともと今のボクにとってはどんな単語も、オードブルみたいに新鮮でその後の興味をそそらせるものになってしまっただけだ。それにしたって、この後味の悪さはなんだろう。もしかしたら、今のボクより前のボクが知っている単語なのかもしれない。それがどういうわけか、ボクの思考か細胞に残留したままで反応し作用しているのだ。そうじゃないとこの気持ち悪さは理解できない。

新しい灰皿を手にして、ニギがテーブルに近づいてくる。

テーブルを拭いてから、そこに灰皿を載せた。

ボクは吸殻を灰皿に落としてから、煙草を取り出して火を点ける。煙りと一緒に思考に停滞するニギの言葉を吐き出す。これ以上関わらない方がよい。熱を帯びた胸の痣がそんなことを教えてくれているような気がする。勿論、どうしてそんな気がしたのかは、ボクにはわからない。

「ビールは？」ボクのグラスを顎で示して、ニギは言った。

「胸が熱い」ボクは首を横に振ってニギに応えた。

「酔ったのか？」

「酔っていないよ。酔うほど飲んではいないつもり」

「良く聞く台詞だ」唇を斜めにしてニギは首を竦める。「良く聞く台詞ほど、信じられないものはない」

「このブルースよりも？」

「そう。このブルースよりも」ニギは両腕を広げて天井を仰いだ。大げさなジェスチャーだ。もしかしたら神様に対するセレモニーなのかもしれない。「水、飲むか？」

ボクはニギの提案に首肯した。

きっと、笑っていなかったと思う。

episode 3..4

時刻は十九時を過ぎていた。その間に灰皿は二回ほど新しいものに取り替えられて、空っぽになったビールは三本に増えた。

吸っていた煙草の銘柄も変わった。ボクの煙草がもう残り僅かだということに気づいて、ニギが用意してくれたものの一つだ。彼が持ってきた小さな籠には、ハロウインのために取っておいたお菓子みたいの色とりどりの煙草でいっぱいになっていた。その中にはボクが吸っていた銘柄は見当たらなかった。でも、その煙草が特別好きってわけじゃない。気がついたらシャツのポケットにそいつはあったんだ。しかも、ジーンズのポケットにはオイルライターまで入っている。これで煙草に火を点けないなんて、お化けを歓迎しない老人みたいに気が利かない。だからボクはそいつを黙って口に迎え入れたというわけ。そういうことだから、知らない銘柄に腕を伸ばすのはまったく抵抗がなかった。ボクが選んだ煙草は籠の中にあるやつで一番彩りの良いものだ。味は前に吸っていたやつよりも幾らか辛くなっている。タールとニコチンも多い。でも、こちらの混合比の方がボクの好みだ。

ジュークボックスは夜に溶けた猫みたいにすっかり大人しくなっている。ときどき光る赤いネオンがバーの静けさを密かに呪っているようで、それが少しだけ可笑しかった。

天井にぶら下がっているファンは相変わらずのろのろと回転していた。ずっとこうしていればいつかは天国へ行けると信じているのかもしれない。そんなことをぼんやりと考える。空気に震える低周波の波が心地よかった。

「ラジオでも聴くか？」カウンターの奥でニギが訊く。

「いや」プラネタリウムにいるみたいに、天井に顎を向けたままでボクは応える。

「そうか。まあ、点けても剣呑な話題しか流れないから最近は」

勿論、ラジオのことだろう。

「昨日の夜、聴いたよ。殺人事件が起こったんだって？」

「連続殺人」ニニギは低く呟く。「まったく迷惑な話だ。シリアルキラーだか快楽殺人だか知らんが、好き勝手にやってくれる」

「随分、詳しいね」

「ここはバーだ。厭でも知識や噂は流れてくる。しかし、正直たらんよ。こちらが厭でもラジオみたいに周波数を弄るわけにはいかないからな、黙って聞くしかない。ままならないもんだ。人間って生き物はな……」

「確かに」ボクは微笑んだ。

「お前、この街の住人じゃないだろう？」

「どうしてそんなことを訊く？」ボクは訊き返す。もしかしたらこの街に住んでいた記憶がないのかもしれないよ、と否定の言葉は口にせず。

「ここに来る連中とは違って、お前には違和感を覚えない。他人事だとしてもこの街で起こったことだからな、そ知らぬ振りをして存外内心でぴりぴりしているもんだ。視線とか仕草とかでそれがわかる。微妙なものだけだな」

胸に停滞する熱までは感知できないみたいだ。だけど、ボクがこの街の住人にしろそうではないにしろ、どちらにせよなんら変わりはない。だってボクは昨日生まれてきたばかりなんだ。情報を蓄積させるだけで精一杯。それをどう処理すればいいのか、ボクにはわからない。つまり、感情が未発達な状態であるか、あるいは情報を信号に変換できない故障した状態だといえる。だからこの街に人死にがあっても、ボクにはあまり影響がない。まるで壁にペイントされた落書きを眺めているみたいに、それは混沌としていて、掴み所のないものなんだ。

「ドライなだけじゃないかな」ボクはそう囁いた。

ニニギは短い鼻息を漏らして。それからあとはなにも喋らなかった。

ボクは天井を眺めるのを止めて、グラスを手取る。
胸に停滞している熱は、まだ冷めない。

ボクの胸の痣は一体誰のものだろうか考える。

勿論、フィジカルにはボク。

でも、メンタルでは、ボクのものではないのは確か。

そいつはあるキーワードに反応しているのだ。

それはボクには評価できないもの。

混沌として、掴み所のないもの。

それが、つまり……、死か。

まだ生きているの？

そんな女の言葉を、ボクは思い出す。

それから、残っているビールを飲み干した。

店内に鈴の音。

グラスに反射する影が二つ。

ボクは黙ってその影を眺める。

髪の長い少女と、後ろで髪を結んでいる女だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1974e/>

あの唄をきかせて

2010年12月4日05時48分発行